

5
2020

三重病院

ニュースレター

news letter vol.249

- 01 こどもの話し方が気になりますか？
- 02 臨床研究部からのお便り—第24回—
- 03 三重病院によろそ
異動のごあいさつ
- 04 新型コロナウイルス感染症対策の取り組みに
ご理解とご協力をお願い致します
外来からのお知らせ／外来診察のご案内



こどもの話し方が気になりますか？

保護者が子供の話し方について相談される主な2つは構音障害と吃音(きつおん)です。

今回は構音障害と吃音について知っておきたいことをまとめました。

1 構音障害

こどもの発音の問題の多くは言語発達に伴う機能的構音障害です。口蓋や舌などの形に特に異常は見られないのに話す時に「さかな」が「たかな」「てれび」が「てでび」などに音(音韻)が変わるなどの問題です。

こどもの発音は「ママ」「ブーブ」「マンマ」など唇を使う音から始まり、舌のさきを使う「タ・テ・ト」、真ん中を使う「ヤ・ユ・ヨ」や「ヒ」など発達とともに発音できる音が増えます。そして4歳頃には舌の奥を持ち上げる「カ、ガ」、6歳頃までに「サ、ザ、ラ」が言えるようになって完成します。誤りなく発音できる時期は個人差が大きいのであせりは禁物です。

家庭でできる対応としては

- ①話すことが楽しめないため、言い直しはさせないようにしましょう
- ②間違った発音をしたら、正しい手本をさりげなく見せましょう
- ③「話し方」ではなく「お話の内容」を聞いてあげて下さい

日常生活のなかで吹くあそび(シャボン玉、笛、らっぱ)、うがい(ぶくぶく、がらがら)食事(なめる、噛む、のみ込む、吹く、吸う)を取り入れると良いでしょう。



小学校入学までにはすべての音が出せるようにしておきたいものです。4歳を過ぎて「カ・ガ行」、年長で「サ・ラ行」が言えないときは訓練も考えましょう。

2 吃音

吃音とは、話し始めに「ぼ・ぼ・ぼく」などと語頭を繰り返す(連発)、「あ—のね ぼ—くね」などと引き伸ばす(伸発)、「……ぼくね」などつまる(難発)の3つの特徴のため滑らかに話せない状態です。

2歳から4歳に発症することが多く、3語文程度の会話ができる頃に始まります。急にはじまることもあります。男児は発症3年で6割、女児は8割が自然回復するといわれています

原因は体質70%、環境30%といわれ「育児方法が吃音の原因ではない」ことははっきりしています。

家族の対応としては

家族として何ができるのか	
してはいけないこと	できること
<ul style="list-style-type: none"> ●話し方のアドバイスを(ゆつくり話して、落ち着いて深呼吸してなど) ●どもつたら言い直させる ●子どもの話し方をマネする ●ことばの先取りをしない 	<ul style="list-style-type: none"> ●邪魔されない発話場面を用意する(1日5分ことばを拾うだけでも) ●聞き上手になる(間をとる。交代交代に話す。おうむ返しなど) ●子どもが「ほめられている」と実感する回数を増やす(お手伝い、「ありがとう」のことばかけなど)

(出典:エビデンスに基づいた吃音支援入門)

家庭での対応として以前は「吃音を意識させないようにする」でしたが、最近は「吃音についてオープンに話す」ほうが良いとされています。

大人が吃音に対して正しい知識をもち、こどもが吃音により嫌な思いを積み重ねないようにし「どもること=悪い」と考えないように環境調整をすることが大切です。

こどもの話し方が心配な時は専門家に相談しましょう。小さなことでも相談し安心して子育てをしましょう。

(言語聴覚士 鶴岡 弘美)

参考文献:エビデンスに基づいた吃音支援入門 菊池良和、学苑社

